令和元年十二月

交通安全子供作文集

小・中学校児童生徒の作文第四十二集

いのちをまもるために

一般社団法人　愛媛県交通安全協会

後　援　愛媛県教育委員会

はしがき

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年交通安全に関する作文を募集をしています。この趣旨は、小・中学生の情操教育に資するとともに、交通安全についての関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校併せて百四十八校から二千二百四十三編という多数の応募がありました。

応募作品について、地元の地区交通安全協会の第一次審査を経た八十一編を、愛媛県交通安全協会の第二次審査で四十二編選定し、更に愛媛県教育委員会に第三次審査をお願いして厳正な審査の上、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んでいただきました。

作文は、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が交通事故の当事者になったことなど、交通安全の大切さについて、率直にかつ切実に訴える内容になっております。

今回、入選作品二十五編を「交通安全子供作文集」第四十二集として発刊するに当たり「愛」をシンボルマークとし、題名は入選作品を代表して、新居浜市立大生院小学校三年生の鍵山碧月（かぎやまみつき）さんの「いのちをまもるために」とさせていただきました。

この作文集が家庭、学校及び職場において、一人でも多くの方に読まれ、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。

応募していただいた多くの小・中学生の皆様に感謝いたしますとともに、作文集発刊のために御協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。県民の皆様には、今後とも交通安全協会の活動に御理解をいただき、一層の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和元年十二月

一般社団法人　愛媛県交通安全協会会長　矢野精一

愛媛県交通安全協会入選作文目次

【小学生の部】

「交通ルールについて」　西条市立橘小学校　二年　佐伯（さいき）　莉和（りお）　1
「いのちをまもるために」　新居浜市立大生院小学校　三年　鍵山（かぎやま）　碧月（みつき）　2
「運転手さんへ」　西条市立国安小学校　三年　菅（すが）　心暖（ここな）　3
私の家族の交通安全　砥部町立砥部小学校　五年　小森（こもり）　白蘭（はくら）　4
交通安全について　大洲市立新谷小学校　五年　上浅（うえあさ）　渚（なぎさ）　5
自転車練習を通して学んだ事　内子町立内子小学校　五年　松岡（まつおか）　菜緒（なお）　7
育め、安全文化　西条市立西条小学校　六年　中西（なかにし）　紗（すず）　8
絶対安全はない　今治市立波方小学校　六年　藤澤（ふじさわ）　七海（ななみ）　9
交通安全について考える　伊予市立郡中小学校　六年　對本（つしもと）　咲希（さき）　11
交通安全について考えたこと　鬼北町立近永小学校　六年　井上（いのうえ）　拓海（たくみ）　12

中学生の部

手を取り合う　今治市立大西中学校　一年　菅（かん）　こはね　14
重い命　松山市立拓南中学校　一年　白形（しらかた）　真奈美（まなみ）　15
事故のない世の中へ　八幡浜市立愛宕中学校　一年　川里（かわさと）　日菜乃（ひなの）　17
免許返納と家族の支え　宇和島市立津島中学校　一年　宇都宮（うつのみや）　功（こう）　18
命を守る私のルーティーン　宇和島市立城北中学校　一年　岡本（おかもと）　愛菜（あいな）　19
私たちが考えるべきこと　新居浜市立川東中学校　二年　阪（さか）　波月（はづき）　21
「交通事故から学んだこと」　西条市立西条南中学校　二年　伊藤（いとう）　柚葉（ゆずは）　22
交通事故を防ぐために　松山市立旭中学校　二年　大塚（おおつか）　玲奈（れな）　23
ハンドルを握るということ　松山市立南第二中学校　二年　飛地（ひじ）　心温（こはる）　25
自転車通学で思うこと　松山市立久米中学校　二年　大山（おおやま）　さくら　26
「生きること」　愛媛大学教育学部附属中学校　三年　東（ひがし）　亜樹（あき）　28
「免許返納で事故予防」　愛媛大学教育学部附属中学校　三年　城田（しろた）　美玲（みれい）　29
交通事故をなくすために　松山市立三津浜中学校　三年　髙橋（たかはし）　穂乃佳（ほのか）　31
考えることから　久万高原町立久万中学校　三年　岩崎（いわさき）　結斗（ゆいと）　32
祖父と免許返納　八幡浜市立真穴中学校　三年　井上（いのうえ）　為雄理（いおり）　34

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

【小学生の部】

「交通ルールについて」

西条市立橘小学校
二年　佐伯　莉和

四月に、学校で交通安全教しつがありました。一・二年生は、道ろの歩き方や、横だん歩道のわたり方を教えてもらいました。道ろを歩くときは、白線の内がわを歩くこと、横だん歩道をわたるときは、手をあげて、左右を見てわたることが分かりました。いつもしゅうだんとう校で道ろをわたるときは、はん長さんがはたをあげてくれて、そこをわたっています。ふだんの日も手をあげてわたるようにしたいと思いました。

わたしは、自てん車にのることはできるけど、まだ一人で、道ろでのったことがありません。これから学年が上がると、自てん車にのることが多くなってくると思います。

わたしが自てん車にのるときに気をつけたいことは三つあります。

一つ目は、ヘルメットをかぶることです。こけたときなどに、頭をまもるためにヘルメットをかぶりたいと思います。

二つ目は、まがりかどをきゅうにとび出さないことです。よくかくにんせずにとび出すと、車にぶつかってじこになるかもしれないからです。

三つめは、下り坂は、ブレーキをかけながらのることです。わたしは、下り坂で自てん車にのることがまだこわいです。今、おかあさんと、下り坂をブレーキをかけながらのるれんしゅうをしています。れんしゅうがおわった時に、おかあさんがいつも、

「がんばったね。」

と言ってくれるのでうれしいです。これからもがんばりたいです。

交通ルールをまもって、じこのない生かつをしたいです。

「いのちをまもるために」

新居浜市立大生院小学校
三年　かぎ山　み月

わたしは、ときどき交通事このニュースをテレビで見ます。テレビの世界のことなので、正直、自分にはかんけいのないことだと思ってしまいます。でも、去年の冬に、わたしは、ひやりとしたけいけんをした事を思い出しました。

それは、いとこの家族とごはんを食べに行った帰りのことです。わたしは、お店から出て、車にもどろうと、いそいで走っていこうとしました。その時、きゅうにちゅう車場に車がはいってきて、ひかれそうになりました。夜だったので、とくに、わたしの小さな体は、車から見にくかったのだと思います。お父さんやお母さんの

「あぶない!!」

と言う大きな声が聞こえて、わたしは止まったので、車にひかれずにすみました。でも、車がキーッときゅうブレーキをかけた音は、今でもおぼえていて、とてもこわかったです。わたしは、車が入ってくるだろうなんて、まったくそうぞうしませんでした。「もし、あの時、車にひかれていたら…」と思うと、本当におそろしいし、考えたくないです。

このけいけんから、交通事こにあわないためにも、ふだんから、「だいじょうぶだろう」ではなく、「ひょっとしたら車がくるかもしれない」と「モシモ…」をよそくすることを習かんにしないといけないことを学びました。そのよそくをわすれるだけで、大切ないのちをなくしてしまうなんて、ぜったいにあってはいけません。わたしは、三年生になって、これから、自てん車にのることもふえるので、右、左、右後ろをしっかりかくにんして、交通ルールをまもり、自分のいのちは、自分でまもりたいです。

そして、車をうんてんする人も、ちゃんと交通ルールをまもるだけでなく、道路を歩いている歩行しゃや、自てん車をうんてんしている人など、すべての人を自分の家族のように考えて、人のいのちを大事に思う心をもって、うんてんしてほしいです。

「運転手さんへ」

西条市立国安小学校
三年　菅　心暖

「キキキーッ。」
急ブレーキの音の後に、大人のこわい声が聞こえてきます。車の中からその人の顔を見ると、本に出てくるおにのような顔。
ときどき、私が乗っている車の後に、ピッタリひっついてくる車があります。何でこんなに近づいてくるのかなって、そっと後ろを振り返ってみると、その人もやっぱりこわい、おにのような顔。
車は、大人をおにに変えてしまうのかな。
「車がないと、生活できにくいんよ。」
お母さんはそう言うけれど、運転するたびに大人をおにする車って、本当にひつようなのかな。
「おはよう。今日もえらいね。」
わたしのおじいちゃんは、病院に行くとき、タクシーを使います。タクシーにのる時、おじいちゃんのにもつを持つお手伝いをするのですが、タクシーの運転手さんは、いつもニコニコでお話してくれます。車を出発させる時も、ニッコリ手をふりながら、わたしの方を見て、いつもおじいちゃんを安全に病院へ送ってくれています。
「あっ。そうだ。」
タクシーの運転手さんのニッコリ顔で思い出したことがあります。横だん歩道で待っている時、止まってわたらせてくれる車の運転手さんも、やさしい顔をしています。車にのっている時、道をゆずってくれる運転手さんの顔もやっぱりニッコリ。ゆずってもらったわたしの家族の顔もうれしそうなニッコリ。車を運転している人は、おにばっかりではありませんでした。
運転手さんへ。運転手さんをおにに変しんさせないために、わたしたちができることって何か考えてみました。
道を歩くときは、右がわを歩いて、二列になったりしないように気を付けます。せまい道から急にとび出したり、むりやり、横だん歩道をわたったりしないように注意します。だから、運転手さんも、おこって、大きな音でクラクションを何回も鳴らしたり、大声でおこったりしないでください。
「ありがとう。」
「ごめんなさい。」
わたしはきちんと運転手さんに、大きな声で伝えるようにします。だから、おにに変しんしないでください。
みんなが、やさしい心とニコニコで、相手のことを考えてあげる気持ちがあれば、きっと車は人をおにに変しんさせたりしないと思います。
さあ、今日もニコニコ運転手さんでいっぱいになるように、わたしは、右がわを歩いて道をゆずってくれた運転手さんに、「ありがとう。」をいっぱい言います。そして、おにの顔がきえてなくなりますように。

私の家族の交通安全

砥部町立砥部小学校
五年　小森　白蘭

今年も、交通事故のニュースがたくさん報道されています。池袋では、八十七さいの男性が運転する車が暴走し、横断歩道をわたっていた三さいの女の子とその母親が亡くなりました。また、大津では、保育園児の列に五十二さいの女性が運転する車がつっこみ、十六人が死しょうしました。そんなニュースが流れるたびに、「交通事故はこわいな。悲しいな。」と思います。母はなみだを流しています。あまりにも理不じんな交通事故に、同じ子を持つ親としていたたまれないと言っています。

私の父、母、祖父、祖母、伯父、伯母、みんな車を運転します。両親は、交通事故のニュースや、亡くなられた方の家族の会見を見るたびに、

「ふだんから安全運転を心がけているけど、気をつけんといかんねえ。」

と話しています。

私の祖父は七十三さい、祖母は六十八さいになります。見た目はわかくて、とても元気です。でも、高れい者による事故が近年多発しているので、より気を引きしめて運転するようにしているそうです。

車屋さんには、今、まちがってアクセルをふんでもスピードが出ないそうちがあるそうで、祖父母の車には、早々に取りつけられました。これで、アクセルのふみまちがいがあったとしても、少しだけ安心です。だからといって油断は禁物ですが、

「できるそなえなら、しとかんとね。」

と言っていました。でも、このそうちは、一万円ぐらいするそうです。東京では、七十さい以上の高れい者には、九割ふたんしてくれるそうですが、愛媛はそうではありません。

愛媛は田舎なので、公共の交通機関が行きわたっていません。祖父母の家も、今治の田舎です。自宅の近くに、バスや電車などは走っておらず、車は生活の一部として欠かせません。よく高れい者の免許証返のうをすすめていますが、私の祖父母のように田舎暮らしだと、したくてもできないのが実情のようです。おそらく、愛媛には祖父母のようにしたくてもできない高れい者がたくさんいると思います。愛媛もより安全に、安心して高れい者が運転できるように、アクセルをふみまちがえてもスピードが出ないそうちのふたんを県がしてくれたらいいなと思います。または、そうち取りつけ義務化したり、全車種につけてくれたらいいのにと思いました。

車を運転する人だけでなく、私たちのように車を運転しない人も気をつけないといけません。母は車を運転しているとき、自転車の乗り方のマナーの悪さをよく指摘しています。高校生や公務員の人はヘルメットを着用が義務化されたため、今はヘルメットの着用している人をよく目にします。しまなみ海道ではサイクリングがさかんなため、愛媛県では他の都道府県よりもヘルメットを着用している人が多いそうです。また、以前よりかっこいいデザインのヘルメットが増えたり、ヘルメットには見えないぼうしみたいなものなど様々な種類のすぐれたものが多くなったりして、ヘルメットをかぶることに抵こうがなくなってきたこともあると思います。でも、まだ二列走行をしていたり、車道に出て走行していたりするなど、危険な乗り方が目立つと言っています。また、私が住んでいる砥部町は山にあるため、坂道がとても多いです。私の家の周りにも、坂や急なカーブが多く、しかも通学路になっているため、より注意して自動車も運転しているそうです。小学生や幼ち園児などの幼い子の自転車の走行は本当にこわいと言って

いました。だから、車を運転している人だけでなく、自転車に乗っている人も気を付けないといけないと思いました。

私は、命を守るために自転車に乗るときには必ずヘルメットをかぶっています。お友達もかぶっています。でも、強制ではないので、全員がかぶっているとは言えません。ヘルメットをかぶると、夏は暑くていやだなと思うときもあるけれど、ヘルメットをかぶっていたおかげで命が助かった人がたくさんいるということを聞いたので、必ずかぶるようにしています。また、学校の交通安全教室で学んだことも、心にとどめて自転車に乗るようにしています。止まったときは、右・左・後ろを見ることや、左右に曲がるときは、手信号で車を運転する人に伝えること、自転車は左から乗ることなど、教えていただいたことを守って乗るようにしています。

事故は、したくてするものではありません。交通事故は、事故をおこしてしまった人も、事故にあってしまった人やその家族も、みんなが悲しい気持ちになってしまいます。ふだんから、自分が交通安全に気をつけるだけでなく、家族や周りの友達にもよびかけて、一つしかない命が悲しい事故で失われることがないようにしたいです。

交通安全について

大洲市立新谷小学校
五年　上浅　渚

最近、登校中の通学はんに自動車がつっこみ、小学生や園児が巻きこまれてケガをしたり、なくなってしまったりする事故が多発しています。交通事故のニュースを見るたびにお母さんは泣きます。泣いている理由を聞くと、もしも事故にあったのが自分の子どもだったらと考えてしまうそうです。事故に合ったのがぼくたちと同じ年れいの子どもだと余計に、その子の親の気持ちを考えつらくて、自分だったら生きていけないと。そして、どんなにこっちが気を付けていても、車がつっこんできたら逃げようがないとお母さんは言います。

高齢者が運転する車の事故のニュースも同じです。見るとこわくなります。他にも無めん許運転や飲酒運転、居眠り運転など様々な事故のニュースを見ます。事故に巻きこまれなくなったという話を聞くと、どうして危険な運転をする人がいるのか不思議に思います。運転をするならそれぞれ責任を持って運転するべきだと思います。高齢者の事故のニュースを見ているとお母さんは、早く運転めん許証を返せばいいけれど、田舎だと買い物とか病院などに行く手段がなくなり、車が運転できなくなると大変なのかもしれない。でも、ちゃんとした意識を持ってくれるといいのにねと言っていました。当たり前のことだけれど、ぼくは絶対に無めん許運転などの危険な運転はしません。ぼくの両親は危険な運転をしないようにとても気を付けています。お母さんがしんどい時にはお父さんが、お父さんがお酒を飲んだときにはお母さんが運転をします。ぼくも両親を見習って、大人になったとき、きちんとルールを守ります。

ぼくは毎朝、自転車で学校に通っています。ぼくの通う小学校では、毎年春に交通安全教室があります。横断歩道のわたり方や自転車の乗り方などをみんなで勉強します。自転車は左側を一列で通ることや横断歩道では一度自転車から降りておしてわたることを学びます。運動場で自転車に安全に乗る練習をして、自転車の点検が終わると、三年生から自転車に乗ることが許されます。ぼくの通学路は土手です。歩道だとせまいし、歩いて登校する友達がいたり、街中を飛ばして運転する車がいたりして危ないからです。どんなに自分たちが気を付けて自転車に乗っていても、つっこんできたときに逃げることができないから、安全面を考えて土手を通って登下校しています。土手は車が通りませんが、日によっては風が強い時があります。そんな日は、いつもより気を付けて自転車を運転するようにしています。ランドセルを背負って、かごに荷物を入れて自転車に乗るのはむずかしいです。気を付けて自転車に乗っていてもハンドルを取られたり、ふらふらしてしまったりすることがあります。転びそうになったこともあります。前に一度、友達とふざけていて土手から落ちそうになり、通りかかった高校生に助けてもらったことがあります。その時はとてもこわかったのを覚えています。また、遊んでいる時に坂道で自転車に乗っていて、ブレーキがすぐにかけられずに友達にぶつかって、けがをさせてしまったこともあります。その時はみんなに心配をかけ、友達に痛い思いをさせ、お母さんにしかられて反省しました。それからは友達と遊びに行く時などは、自転車の乗り方に十分気を付けるようにしています。自転車は歩くよりスピードが出ます。その分ぼくたちが気を付けなければ、大きな事故につながることもわかりました。ニュースでも小学生の乗った自転車がスピードを出しすぎて、歩行者にぶつかって大けがをさせたという話を聞きました。その事故では小学生の親がたくさんのばいしょう金を払ったそうです。今まではあまり考えたことがなかったけれど、自転車の乗り方によって人をケガさせたり、その人の人生を変えてしまったりすることもあるこわい乗り物に変身するのだと思いました。

小学生の交通事故のうち、約八割が自転車の事故だそうです。自転車はそれだけ危険な乗り物だということをぼくたちは分かってなければなりません。交通事故を減らすためにはまずは、自分自身が交通ルールをきちんと守ります。そして、相手に気を配り、ゆずり合うことも大切だと思います。当たり前だけどこれができれば、必ず事故は減ると思います。事故を起こせば自分も相手も悲しくなり、悪いことばかりです。だれもつらい思いをすることがないよう交通事故がゼロの町になればいいなと思います。

自転車練習を通して学んだ事

内子町立内子小学校
五年　松岡　菜緒

私がこの交通安全作文を書こうと思ったきっかけは、四年生の終わりごろから始めた自転車練習でした。始める前は、あまり自転車に乗る事もなく、それほど興味もありませんでした。しかしやってみると、以前までとは交通の見方ががらりと変わってきました。以前は何気なく見ていた道路標識も「あ、これは〇〇という標識だ。」などという少し専門的な見方に変わりました。でもそんな見方になってくると、気になるのが交通事故です。

事故ではたくさんの人がぎせいになります。たった一人が起こした事故に多くの人がまきこまれる可能性だってあります。そんな事故の事についていいたいことが二つあります。それは「命を軽く考えすぎない」という事と「事故を起こす可能性は全員にある」という事です。事故を起こした人は、おそらく「自分が事故を起こすわけがない。」と思っていたんだと思います。そしてその気のゆるみが事故につながったのだと私は思います。だから、その事故を起こす可能性は自分にもあるときちんと自分で自覚してほしいです。それは車ももちろんですが自転車もです。私は坂をもうスピードでかけ下りている自転車や、イヤホンをつけて走っている自転車を見た事があります。それは非常に危険です。もし坂を下りた時に車がきていたらあなたは止まれますか?イヤホンで周囲の音が聞こえない時、車が来た事がわかりますか?みなさんもこのような事をして「少し位大丈夫。」などと思っていませんか?この「少し位」が命取りなのです。自分では危ないと思っているものの、「少し位。」と思って結局してしまうのではないでしょうか。だから自分が危ないと思った事は少し位と思わずやめてください。そしてそれを友達がしていたら、一緒にやらずに注意してあげましょう。それが本当の友達だと思います。

それから車や自転車の事故の他に歩行者が起こす事故もあります。それは飛び出しです。道路に飛び出したボールを取りに行って事故にあったり、せまい道から広い道に出る所を飛び出して事故にあったり。このような事故は多くが子どもが起こしてしまう事故です。車は急に飛び出してくるとは思わないので止まれません。こうなると誰も止める事ができなくなり「事故」になります。そんな事故を止めるために左右確認をして渡ってほしいと思います。これだけでも事故は減らせられます。ですが歩行者は事故を起こす方より「事故にあう」という事の方が多いです。歩行者はきちんとルールを守って歩いていたのに、車がルールを守っていなくて事故にあう。という事が非常に多いです。そしてその事故で亡くなってしまう人がたくさんいます。命は一つです。なくなったらもう二度と戻っては来ません。車や自転車などの乗り物は使い方を間違えば凶器にもなるおそろしい物です。だから、そのような事にならないよう、しっかりと注意して運転をしてほしいです。

事故を起こして悲しいのは、起こした人だけではありません。家族や友達などの数えきれない人達です。そして、もし、事故でだれかが亡くなったら。その人の遺族はどうなるのでしょうか。ずっと一緒にいた大切な人を失ってどうなるのでしょうか。事故は悲しみと同時にその家族の幸せをうばってしまいます。私はそんな幸せをこわさないために、早く事故がなくなってほしいと思います。

そんなおそろしい事故ですが、始まりは全て人間です。人間が起

こした事故に人間があっています。私はそんな事故は一人一人が気をつければ絶対に防げる事だと思っています。でもまだ毎日事故が起こっています。それはまだ一人一人が注意していないからだと思います。だから早く全員が事故の事を意識し、いっこくも早く事故のない世界になってほしいと思います。

育め、安全文化

西条市立西条小学校
六年　中西　紗

三千四百八十七。これは、昨年一年間に愛媛県内で発生した交通事故の件数です。単純に計算すると、毎日約十件ちかくも交通事故が起きていることになります。愛媛県や警察などの取組で、年々少しずつ交通事故の件数が減っているそうですが、これから少しでも減らせられるように、自分たちにできることは何か考えてみました。

私は、毎日歩いて学校に通っています。この四月から班長になり、班のみんなが安全に登校できるよう気を付けていることがあります。一つは、低学年の歩くペースに合わせることです。なぜなら、低学年と高学年では歩く歩幅が違い、班がばらばらにならないようにするためです。もう一つは、横から車が来たら早めに止まり、車がぬけたのを確認してからわたるようにしています。私の通学路には、信号も横断歩道も一つもありませんが、最近、友人と二人で下校している時のことです。細い道路からバイクが私たちの目の前を横切ってきたのです。私と友人はおどろき、こわかったことをはっきりと今でも覚えています。そこの細い道路は、へいや草木で死角になっており、ふだんは、車の通りが少ないところでした。私は友人との会話に夢中になり、集団登校ではいつも気を付けているところなのに、油断していたのです。また、今年の五月に行われた交通安全教室のことを思い出しました。車が急ブレーキをかけても、かなりの空走きょりがあることを実験で見せていただき、車はすぐには止まれないということを学びました。

私はよく、友人と遊びに行く際には、自転車を利用します。友人と

会話をしながら自転車に乗っている時、横二列になっていることがありました。その時に、後ろからすごいスピードで自転車が走ってきて、歩道から道路に出て私たちを追いこしていきました。車がたまたま通っていなかったので事故が起きませんでしたが、とても危険な場面でした。私と友人は、すぐに一列になり、歩道のはしを走るようにしました。私も自転車に乗っていて、歩行者が歩道をふさいでいて、不快な思いをしたことがあります。自転車に乗っていて、歩行者のことをじゃまに感じたしゅん間でした。

私は、このような体験から歩行者にとっては、自転車やバイク、車がこわい存在であること、自転車にとっては、歩行者がじゃまな存在に感じることがあるということが分かりました。しかし、自転車に乗る時には、歩行者の立場や気持ちを理解したうえで、乗らなければならないと思います。車やバイクは、自転車や歩行者のこと、常に交通弱者の立場や気持ちを理解して、運転していただきたいです。交通事故は、一しゅんで起こるものです。交通事故は、ぐう然が重なって起こるものです。一人ひとりがルールを守り、思いやりやゆとりのある運転をすることで、事故は減らすことができるはずです。また、私たちが、交通安全の文化を代々つないでいくことも大切だと思います。一人ひとりがこのような自覚をもつことで、安全文化が育まれ、かけがえのない命、家族を守っていけるのではないでしょうか。私は、そう信じています。

絶対安全はない

今治市立波方小学校
六年　藤澤　七海

「危ない。」

背後から先生の声が響きました。

その日は、委員会のあいさつ当番の日でした。いつもより早く学校に行くために、車で送ってもらいました。私の学校は、車の駐車場から正門へ行くには横断歩道を渡らないといけません。信号機のない横断歩道です。時間帯によっては車通りが増えるので、小学校に入学したときから、

「正門前の横断歩道を渡るときは、手を挙げて、左右を見て、車が来ていないことを確認してから渡りましょう。」

と先生に教えてもらっていました。だから、渡るときは、必ず左右の確認をしてから渡るようにしていました。

でも、その日は、手を挙げていても、仕事で急いでいる人ばかりなのか、車はなかなか止まってくれませんでした。やっと一台の車が止まってくれたので、私は横断歩道を渡ろうと一歩踏み出しました。そのときです。

「危ない。」

止まってくれた車のすぐ後ろにいた車が、いきなり追いぬいてきて私とぶつかりそうになったのです。近くにいた先生がとっさにさけんでくれたおかげで私は立ち止まり、事故にあわずにすんだのです。あのとき先生がさけんでくれていなかったら、私は大事故にあっていたかもしれません。それなのに、その運転手さんは少しも悪いと

思わなかったのか、平気な顔をして通り過ぎて行きました。「横断歩道なのに追いぬきするの？」と私の心臓は、いつまでもドキドキが止まりませんでした。

私の家の前の横断歩道も信号機がありません。こちらは、学校の前と比べるともっと危険です。父が若いころと私が保育園のころに、死亡事故が二回あったと聞いたことがあります。それは両方とも、車のスピード違反が原因だそうです。「家の前の道路は信号がないし、直線きょりが長くスピードが出やすい道だから、絶対に車が止まるまで渡ったらいかんよ。」

これが母の口ぐせです。小さいころからずっと聞かされ続けて、今でも出かける前は必ず言われます。私は心の中で、「毎回毎回同じことの繰り返し。いいかげん分かっているし、うるさい。」と思っていました。でも、自分が事故にあいかけたことで、母がなぜあんなにも毎回同じことを繰り返して言うのかがわかりました。私のことを思って言ってくれていたのです。

今までは、母の言葉にも耳を貸さず、車が止まってくれたら、何も考えずにさっさと早足で渡っていました。しかし、自分が事故にあいかけたことがあってから、私は車が止まってくれても少し時間をおいて、周りを見てゆっくり渡るようになりました。車が止まっているから安全。この考えは間違っていると分かりました。この世に、「絶対安全」という言葉は存在しないのです。歩行者、自転車に乗っている人、小さい子からお年寄りまで誰にでも事故にあう可能性があるのです。

私は、運転手さんにお願いしたいことがあります。朝急いで仕事に行く気持ちは私も分かります。五分でも長く寝ていたい。五分でも長く家にいたい。でもその五分を早起きして、準備をして家を出発してください。そうしたら、ゆとりのある運転ができ、事故が減ると思います。私も交通安全に気を付けますので、運転手さんも安全運転お願いします。

交通安全について考える

伊予市立郡中小学校
六年　對本　咲希

「ガシャン！」

自転車で転んで顔を上げると目の前を車が通りすぎて行きました。それを見た瞬間、心臓が止まりそうになりました。転んでぶつけたけがにも気づかないくらい、私はドキドキが止まりませんでした。転んだ場所がもう少し道の真ん中によっていたら…あの車がもっとスピードを出していたら…考えれば考えるほど怖くなりました。

私が転んだ原因は、重たい荷物をカゴに入れていたことです。また、反省する点は細い道から広い道に出る時に、一時停止しなかったことです。普段は細い道から広い道に出る時は一時停止しています。でもこの時は、「いつも通っているから大丈夫」という油断からこのようなことになってしまったのだと思います。

この経験から今私は重たい荷物はカゴの中に入れず、リュックサックなどの背負える物に入れて、肩にかけています。前が傾かないようにするためです。次に直したことはどんな道でも曲がる時には一時停止することです。後、どんなに急いでいてもスピードを出しすぎないようにしています。これからも守っていきたいと思います。

このように自分一人が気をつけていても、交通事故にあわないとは限りません。ニュースでも悲しい事故をよく目にします。交通ルールを守っている人が交通ルールを守っていない人に傷つけられています。とても悲しくて、怒りも感じます。どうすればこんな悲しい事故はなくなるのでしょうか。

一、時間に余裕をもって行動する。

急いでいる時はスピードも出すし、「これぐらいなら大丈夫」と交通ルールを破りやすくなると思うからです。時間を守ることは大変だけど、命には変えられません。どんなに急いでいても、交通ルールは守るべきです。そのためには、日頃から時間に余裕を持つことが大切だと思います。

二、思いやりを持って運転する。

最近、「あおり運転」と言いう言葉をよく耳にします。少しイラだったからという理由で相手をあおった結果、事故に繋がることが多いそうです。自分にも家族がいるように相手にも家族がいます。自分勝手な行動をせずもっと思いやりを持つといいと思います。

三、危ない場所は整備する。

私の住んでいる地域には横断歩道がない通学路がありました。そこは、人通りが少ないという理由で車に乗っている人は速いスピードで私達の前を横切ります。多人数いると車は止まってくれますが、一人や二人など人が少ない時はなかなか止まってくれませんでした。その場所に今年横断歩道が整備されました。また、速度制限の標識や通学路とかかれた標識も整備されました。その結果、少人数の時でも車が止まってくれるようになりました。また、スピードも前より落として運転してくれているように思います。自分達の通学路が安全になって私もうれしいし、班の中にまだ低学年の子達もいるので安心できます。

これらの整備は地域の人達が懇談会で話し合い、市に要望をしてくれたそうです。

このように自分達の住む街は自分達が一番よく知っています。危ない場所は話し合い、整備していくことで、事故は減ると思います。

このようなことを守ると交通事故は減ると私は思います。

私は今、通学班の班長をしています。朝は出勤中の車がたくさん通

っているので気をつけないといけないことがたくさんあります。
例えば、信号待ちの時です。ニュースで車が突っ込んできたなどという話を聞きました。なので、白線がひいているところから少し離れて信号を待っています。
他にも気をつけていることはありますが、一番気をつけているのは右の歩道から左の歩道に移動する時です。西日本豪雨で通学路の八幡神社が土砂崩れに合い、危ないという理由で八幡神社の前にくると左の歩道に移動し、通学しています。この移動する時に、左右を確認しているのですが、たまに先が見えにくいカーブから速いスピードで車やバイクが通ります。一回、渡りきった後すぐに速い車が横切ったことがあります。最近は速い車やバイクは通らないのですが、この経験がすごく怖かったので通学の時は左右をしっかり確認して通っています。
班長は正直に言うと最初めんどくさいと思っていました。でも、ニュースで交通事故の話を聞くと班長としての目線が変わりました。「私がみんなを安全に学校につれていかないと!」と思い交通安全に気をつけています。
私はこれからも交通ルールを守り班長としての自覚を持ち、安全に過ごしたいです。

交通安全について考えたこと

鬼北町立近永小学校
六年　井上　拓海

ぼくは六年生になって、自転車で遊びに行くことが多くなりました。ぼくのばあちゃんは、倉庫から自転車を出しているぼくを見かけるといつも、
「坂道はおりなさいよ。」
とか、
「気を付けて行きなさいよ。」
と言って心配してくれます。
ぼくが自転車に乗るときに気を付けていることは、ヘルメットをかぶることと、友達と出かけるときは一列になっていくことです。急な坂道や交差点では、自転車を押して歩くようにしています。曲がり角でも、止まってから車が来ていないか確認して曲がるようにしています。そんなときに、車の人が止まってくれたり、道をゆずってくれたりするときがあります。ぼくは、そのときにお礼の会しゃくをするようにしています。そうすると、車の人もぼくも、気持ちよく道路を行き交うことができるからです。
一学期に交通安全教室がありました。そこで、トラックの運転席に実際に座らせてもらいました。そうすると、運転する人の視界がどんなものか分かりました。視界は高くて、見晴らしはよかったけれど、手前にいる歩行者や自転車は見づらいことが分かりました。ぼくは、トラックの運転手さんは高いところから見ているので、周りがよく見えていると思っていました。だけど、そうではなかったので、トラックの近くには行かないようにしようと思いました。

その他に、車でぶつかったときのしょうげきを体験しました。ぼくは、時速五キロメートルはスピードがおそいと思っていました。でも実際に乗ってみたら、意外としょうげきが強くてびっくりしました。これでぶつかったらけがをしてしまうのでこわいと思いました。

次に、内輪差の実験を見ました。風船を人の代わりにして、トラックが曲がるとどうなるかを見せてもらいました。そうすると、トラックの内側のタイヤが風船に当たって、風船が割れてしまいました。ぼくは、横断歩道で信号を待つときに、前のほうに立つと危ないので、前のほうには立たないようにしようと思いました。

この交通安全教室で、今まで知らなかったことや、気付かなかったことが分かりました。これから自転車に乗るときや、歩くときには、車に気を付けたいと思います。そして、車だけでなく、自転車もスピードを出し過ぎると、大きな事故を招くことがあります。だから、自転車に乗るときは、歩行者にも注意したいと思います。

【中学生の部】

手を取り合う

今治市立大西中学校
一年　菅　こはね

祖母と毎週、英会話教室に行って楽しかったことを覚えている。若いお母さんたちに混じって私の手を取り、先生の英会話や英語の歌に合わせて踊ったり、跳ねたりしてくれた。私の両親は共働きのため、仕事から帰っても忙しい。そのため、私や姉は祖父母が世話をしてくれた。そんな祖父母も四人とも七十代になってきた。私の家は四世代で住んでいるので、祖父母や曽祖父母がとても身近な存在だ。歳をとったからできること、歳をとるとできなくなることを身近に感じることができる。今も変わらず私の身の回りの困りごとをすぐに解決してくれて、話もたくさん聞いてくれる大好きな祖父母だが、ある時祖母の運転する車に乗っていてヒヤッとしたことがあった。それは、塾へ行くため急いで支度をし、祖母の助手席に乗っていた時のことだ。夕暮れの細い道を右折しようとする祖母に私は、

「ばあば、人がおるよ！危ない！」

と叫んだ。祖母は急ブレーキを踏み、私と祖母が乗った車は前につんのめって止まった。間一髪で止まった車の前を驚きながらも会釈をして通り過ぎる人を見て、私と祖母は胸をなでおろした。ゆっくりと車をまた走らせながら祖母は、

「こはちゃん、びっくりさせてごめんね。ばあば、向こうから対向車が来よったけん、対向車ばっかり気になって…。歳をとったせいかねぇ。対向車と曲がってくる人を一緒に見るんが難しいんよ。」

と言った。ニュースでは、高齢ドライバーが加害者になる事故が増えていることが報じられているが、自動車事故はある日突然、普通の暮らしをしている人を加害者にも被害者にもしてしまう。そして、それは私たち家族にも起こることなのだとわかった瞬間だった。

私の住んでいる今治市では、『高齢者に優しいまちづくり』をスローガンに、平成三十年九月、運転免許証自主返納推進事業に係る協定書を警察署や交通安全協会と締結した。運転者が免許証を自主返納すると受けられるサービスを警察署がどんどん開拓していったり、過去に運転していたことを証明する運転経歴証明の発行費用を市役所が負担したりしている。私は実際に、自主返納をする人が今治市にどれくらいいるのかを知りたくて、今治市役所市民生活課に電話をして聞いてみることにした。

「今治市の昨年の十月から今年五月までの自主返納した人数を教えてください。」

「今治警察署管内では四百六十二人、伯方警察署管内では八十人の人が自主返納をしています。そのうち、九十パーセント以上が六十五歳以上の方です。」

と教えてくださった。他にも、事業をする前と後を比べて自主返納する人数の変化を聞くと、

「この事業をした後、返納する方が月平均三十人ほど増えています。」

とも教えてくださった。

私は、予想していた以上に返納する高齢ドライバーが多いことに驚いた。そして同時に、生活の必需品である車がなくなると、私の祖父母の生活がどう変わるか想像して心配になった。

「車がなかったら買い物と病院に行く時が一番困らい。」

と言う祖父母が、利用しやすい交通サービスがもっと発展したらいいなと私は思う。例えば生活に必要なものを乗せた車が家の近くまで来てくれると、重い荷物を運ばなくてもすむので車を使わずに買い物ができる。また、乗り降りがしやすい車が一日に何回か近所を回ってくれるサービスがあったら、気軽に病院や行きたい所に行ける。きっとたくさんの高齢者や、車の運転をしない人たちに喜ばれることだろう。

私は祖母に聞いてみた。

「ばあばは、いつまで車に乗るん？」

「こはちゃんが、高校卒業するまでがんばって乗るよ。塾の送り迎えとか、雨の日に自転車で学校に行けん時に乗せてあげるけんね。」

優しくほほえむ祖母は、ただただ家族のためだけを思って車の運転をしているのだと感じた。そんな祖母が運転で怖い思いをせずにゆっくり楽しく乗れるように、社会みんなが優しい運転をしてくれたらいい。そして私にもできることがある。それは幼い時に私がしてもらったように、今度は私が祖父母の手を取り、行きたい所に一緒に行って、一緒にたくさん話して、一緒にたくさん笑って、楽しく過ごさせてあげることだと思う。

重い命

松山市立拓南中学校
一年　白形　真奈美

一人の命は、地球よりも重い。それが一瞬で奪われるのが交通事故です。

私自身、小学五年生の時に、交通事故にあいかけたことがあります。そのころは、自動車が登下校の列に突っ込み、小学生が巻き込まれたり、居眠り運転の車が歩行者をはねたりする事故が多発していました。母からは、「交通事故は、いつ、どこで起こるか分からない。だから、しっかり左右を確認してからわたりなさい。」と、散々言われました。しかし、私は、「交通事故なんて、滅多に起こらないだろう。」と思い、母の言葉を軽く聞き流してしまいました。

ある日、いつものように登校して授業を受け、午後の授業もとどこおりなく終えて、下校しました。学校で起きたおもしろいことを友達と話しながら、帰っていました。横断歩道で止まり、信号が青になって、わたろうとした、その時。私の目の前を自動車がものすごいスピードで横切っていきました。その距離はたったの三十センチメートルほど。とても危なかったことを、今でもありありと思い出します。もしも、その自動車に私が気付かなかったら、私は今生きていないでしょう。あの時、事故になりかけたのは、運転手のせいだけではないと思っています。信号が青でも、しっかりと左右を確認しなかった私の不注意のせいで事故になりかけたのだと、私は大いに反省しています。

この出来事が起きてから、母の言葉、先生の言葉を素直に受け入れ、しっかりと左右を確認するようになりました。どれだけ急いでいても、絶対に確認します。その前までは、「もう高学年になったから、左右を

確認しなくても、交通事故になんて、巻き込まれるわけない。」と、なんの根拠もない思い込みで、決めつけていました。それは大きな間違いでした。他のみなさんには、その事に今気付いてほしいと心から願っています。事故で命を失うつらさを、私は知っているから。

その少年は、私が四年生の時に、習い事の教室に入って来ました。彼には、妹がいて、一緒に仲良く通っていました。彼は、お菓子のラムネが大好きで、休み時間にいつも食べていました。字を書くのも一生懸命頑張っていました。そんな彼は、もう居ません。彼と妹と彼の母との三人で買い物に行く途中、先頭を歩いていた彼、妹と母親は、トラックにはねられてしまったからです。トラックの運転手は、信じられないことに、居眠り運転をしていたのです。

救急車で搬送され、三人とも入院しました。妹と母親は、一命を取りとめました。けれども、先頭を歩いていた彼だけが、とてもひどい怪我を負ってしまっていて、意識が戻らずにそのまま亡くなってしまいました。彼の妹は、退院後しばらくして習い事の教室にまた通うようになりました。彼の妹の首にはひどい痣ができ、うでを骨折していました。彼の母親も、とても重傷で、本当に交通事故の恐ろしさを思い知らされたできごとでした。私は親族や身内以外で、身近な人が亡くなったのが初めてで、彼の死を知らされたときは、驚きとショックのあまり、泣くことすらできませんでした。習い事の教室の先生とみんなで、彼の大好物のラムネをお供えし、彼を見送ったあのときの思いを、私は一生覚えていると思います。

身近な友人、親族、身内が亡くなり、今でも悲しみ続けている人がこの世に何千人、何万人、何億人もいます。人が亡くなる。その事実はどうやっても変えようがなく、どれだけ努力しても取り戻すことができるものではないのです。だから、今生きていることは本当にすばらしいことなのです。この世に生を受けたならば、悔いを残すことのないよう今を一生懸命楽しみ、笑うことが人間やすべての生き物の人生の義務だと思います。だから、そのたった一度しかない人生を無駄にしないために、運転をするのであれば、自分の命を大切にする義務、歩行者の命を守る義務があると思います。

運転をするときは、責任を持って運転してほしい。しかし、私が体験したようなことにならないために、歩行者側にも交通事故のことを意識して、気を付けてほしい。現在では、煽り運転も、さまざまな場所で問題になっています。事故を起こさないためには、周りが気を付けるしかないと思います。煽り運転の車からは、なるべく離れ、さけることで事故を少しでもなくす自助努力をしなければならないと、悲しいニュースを見ながら思います。

どんな人も、命を持っていることに変わりありません。命の重さは、みんな一緒です。一人一人が、今の自分をもう一度見つめ直して交通事故による悲劇を避けるために自分ができることを、考え、実践できるよう願っています。

事故のない世の中へ

八幡浜市立愛宕中学校
一年　川里　日菜乃

最近、車や自転車に関する事故のニュースをテレビでよく見ます。その中でも、小さな子どもや同世代の人が犠牲になった事故は、特に悲しくなります。

ずいぶん前に、保育所の子どもたちがお散歩へ行く途中、右折車の不注意での事故に巻き込まれ亡くなったというニュースがありました。私は、この事故がとても印象に残っています。運転する人のほんの少しの油断で起きた事故です。一瞬の出来事で命が奪われると思うと、体が震えてきます。車はほんとうに怖いです。車は移動手段として、とても便利です。生活になくてはならないものとなっています。しかし、交通ルールを守るのはもちろん、ゆずり合いの心を持って乗らないと、事故を起こしたり、自分自身も危険な目にあったりします。

私も車に乗せてもらった時に、たまに危ない人や車を見かけます。赤信号になっているのに、横断歩道を慌てて渡っている人や左右確認をせずに急に飛び出してくる人、横断歩道のない場所を堂々と平気で歩いて行く人。また、狭い道をすごいスピードで走る車や携帯電話をしながら運転する車、あおり運転をする車。他にも、危ないと感じたことはたくさんあります。特に、私の家の近くの道路では、「止まれ」の標識があるにもかかわらず、一時停止をせずに走って行く車をよく見かけます。そんな人たちがいるから、事故は起こるのだと思います。最近は、自動ブレーキや高速道路での自動運転など、事故が起きないための工夫がされた車が増えていますが、事故はあまり減っていないように思います。やはり、車に頼るのではなく、運転する人が安全運転の意識を持って、ルールを守って運転してほしいです。

私は、横断歩道を渡るとき、車に止まってもらうと「ありがとうございます。」と明るく大きな声で言った後、おじぎをするようにしています。止まってもらった車に感謝しているからです。一方で、横断歩道で待っていても、車が全然止まってくれず、残念な気持ちになることもあります。

先日、部活動へ行く途中、横断歩道を渡るときに車が止まってくれたと思い、いつものようにお礼を言って渡ろうとしました。その時、止まっていた車が急に動き出したのです。私はびっくりして、あわてて後ろに下がりました。この時、車はほんとうに怖い、気を付けないといけないと改めて感じました。その日、帰ってから両親にそのことを伝えると、「危なかったね。無事でよかった。」と私のことをとても心配してくれました。何かが起きてから、命を落としてからでは遅いのです。これからは、車が止まってくれた時も、きちんと安全を確認してから渡るようにしたいです。

私は、たまに自転車に乗ります。きちんとヘルメットもかぶり、いつも安全運転を心がけて乗っているつもりですが、急いでいる時に、自転車に乗ったまま横断歩道を渡ってしまったことがありました。そのときに、このようなちょっとした行動が事故につながるんだと反省し、それからは、横断歩道を渡る時は、必ず自転車から降りて、引いて歩くようにしています。自転車に乗っている人にもルールを守らない人がたくさんいます。平気で右側の歩道を走る、雨の日に傘をさしてしゃべりながら並走する、すごいスピードで曲がってくるなど、いつ事故が起きてもおかしくありません。車だけでなく、自転車もルールを守って乗ってほしいです。

私は、悲しい交通事故のニュースはもう見たくありません。交通事

故のない世の中にするために、一人一人がどうすれば事故が起きないかを考え、思いやりの心を持ち、生活していくことが大切だと思います。私は将来、運転免許を取りたいと考えています。車を運転することは、とても責任の重いことです。必ずルールを守り、安全運転を心がけるようにしたいと思います。そして、みんなが安心して暮らすことのできる素敵な未来を私からつくっていきたいです。

免許返納と家族の支え

宇和島市立津島中学校
一年　宇都宮　功

「祖母が免許を返納した。」と母から聞いた。とても急なことに感じた。祖母は、七十四才。まだまだ、元気。僕の家から、車で一時間くらいのところに住んでいる。僕が小学校に入学するまでは、土日に両親が仕事の時は、祖母が一緒に留守番をしてくれた。僕たち兄弟の誕生日や、家族のイベントの日には、「顔を見に来た。」と言って、プレゼントを持ってサプライズで現れることもよくあった。優しくて、元気で自由。そんな、印象の祖母だ。

免許を返納した理由をたずねると、万が一のことを考えてということだった。祖母は、二年前、脳に血栓が見つかり血栓を取り除く手術をした。大きな手術だったが、術後の経過もよく、今では元通り元気に過ごしている。術後半年間は運転を控えるように医者から言われ、しばらく運転をやめていたが、医者から許可が下りてまた運転を始めていた。僕の家にも、また車で遊びに来てくれていた。

しかし、高齢者ドライバーによる交通事故のニュースを見るたびに、祖母は、元気にはなったが、脳を手術したから、万が一運転中に何らかの発作が起きるかもしれない、自分だけでなく誰かを巻き込んではいけない、そう思って免許を返納することを決めたということだった。

祖母に、免許を返納してどう感じるか聞いてみた。

「事故が起こらないうちに、免許を返納してよかった。事故を起こさないで返納できてありがたい。」

という答えが返ってきた。困っていることはないか聞いたら、日常生活が不便になったということだった。免許を返納するとバス代が割引になるのだが、バス停までが遠いし、バスの便が少ない。持てる荷物

にも限りがある。

「買い物も通院も、運転できたら自分でできたのに、みんなに迷惑ばっかりかけてごめんね。」

と、申し訳なさそうな声だった。

免許を返納した祖母は、なかなか僕の家に遊びに来ることができなくなった。車で一時間かからない道のりも、バスでは待ち時間や乗り換えで三時間以上かかる。体は元気になったのに、免許を返納したことによって、祖母から元気がなくなってしまったように感じる。それでも、免許を返納してよかったと言う祖母。車を運転するということの責任の重さをひしひしと感じた。

高齢者ドライバーによる事故の現状を見ると、年齢や病気による免許の返納は必要なことだと思う。家族の者が、しっかり免許の返納について考え薦めることも必要だろう。危ないから免許を返納しなければならないと伝えるだけではなく、免許を返納してからの生活をどのように支えるかを伝えることで、免許返納を考える高齢者の方は増えると思う。そして、免許を返納しても、高齢者がもっと住みやすい社会を作っていく必要があると感じる。

まず、僕にできることは、自由が少なくなった祖母に自分の方から会いに行くことだ。電話で話す機会も増えた。そんな家族の小さな支えが、免許返納を支える社会づくりの一歩だと思う。

そして、高齢者ドライバーだけでなく、ハンドルを握るすべての人が、万が一のことを考えながら、自分の大切な家族のことを思い浮かべながら安全運転を心がけることで、不幸な交通事故を減らすことができるのではないだろうか。

命を守る私のルーティーン

宇和島市立城北中学校
一年　岡本　愛菜

中学生になって自転車通学をするようになり、私は毎日のように自転車に乗るようになりました。朝、家を出発する時、荷台にかばんをしっかりと結び付けます。しっかり結んでおかないと、道路などに落ちてしまった時、事故につながりかねないからです。そして、ヘルメットをかぶります。あごのベルトがフィットしているか、頭の後ろのベルトがゆるくないか、毎回確認します。万が一、事故にあってしまった時、衝撃で頭を打ってしまったら、ヘルメットがぶかぶかだと何の意味もありません。だから、しっかりと確認しています。自転車に乗って、さあ出発。玄関を出て約三分。ヘルメットをかぶったり、かばんをしっかり留めたりするこの三分間が、自転車に乗る人の大切な時間だと思います。

私が、「危ないな」と思う時間帯があります。それは、下校時間です。みんな部活動が終わり、友達と話しながら帰っている人、用事があるのか急いで帰っている人など、それぞれです。そんな中、時々目の前の道で、道幅一杯に広がって下校しているのを見かけます。しかも、自転車通学なのに、徒歩通学の人と一緒に、ゆっくりと自転車をこぎながら帰っている人がいます。私はその時、同じ自転車通学の人の後ろにつき、一列で下校していました。友達は、その人たちを追い抜こうとしましたが、左右にゆらゆらしながら走行していたため、追い抜くことができません。「すみません。先に行ってもいいですか。」と声を掛けようと思いましたが、なんとなくためらってしまい、言うことができませんでした。しばらく後ろを走行していると、前の人たちが振り向き、後ろが渋滞していたことに気付いたのか、左右によけてく

れました。道路は、公共の場なので、他の通行者に対して配慮することが大切だと思いました。また、他にも猛スピードで通りすぎる人もいます。そういう人を見るたびに、自分のことしか考えていないようで、何だか悲しい気持ちになります。

私が特に気を付けていることは、休みの日に友達と遊びに行く時のことです。私の家は少し離れたところにあるので、自転車で出かけることが多いのです。その時も私は、しっかりとヘルメットをかぶって行きます。一緒に遊ぶ友達も、きちんとヘルメットをかぶっています。時々、他の友達とすれ違う時があります。でも、その友達は、ヘルメットをかぶっていません。しかも、並列運転で通り過ぎて行きます。公園などに停めている自転車を見ると、ヘルメットがかごに入っているのは数台です。これは、ほとんどの人がヘルメットをかぶっていないということになります。一緒に遊んでいた友達が、「ちゃんと真面目にかぶっている自分たちが間違っているみたいで、なんか嫌やね。」と言いました。私は、「その通りだ。」と思いました。ちゃんとルールを守っている人たちが、周りの人たちから見れば間違っていると思われるのは、違うと感じました。

私は、ヘルメットをかぶっていない友達に、「なんでヘルメットかぶってないの？」と、一度だけ聞いたことがあります。返ってきたのは「おしゃれじゃないから。」「服と合わないから。」という言葉でした。意外な言葉に驚きを隠せませんでした。心の中で、「命より、自分の見た目の方が大事なのかな。」と考えました。私は、自分の見た目がおかしくても、おしゃれでなくても、ヘルメットをかぶります。理由は一つです。それは命の方が大事だからです。自分の命よりも大切なものはないと思います。

最近、交通事故で亡くなる方が多く、「自分の命は自分で守らないといけない。」という思いが更に強くなりました。自分がどれだけ注意していても、相手が飲酒をしていて巻き込まれることがあるかもしれません。相手の運転手がしっかり交通ルールを守っていても自分が「ながらスマホ」などしていれば、事故になることもあります。たった一人の油断が、被害者も加害者も増やすことになります。交通事故は、「とても身近にある危険」だと私は感じています。その危険をどうやって回避すればいいでしょう。まず、自分自身が、交通安全についてどう考えているかを確認することが、第一歩だと思いました。交通安全について関心を持ち、自分に置き換えて考えるようになれば、交通安全に対する考えが深まり、周りのことを考えた行動ができるのではないかと思います。

譲り合いの精神で、みんなが笑顔で過ごせるような町。交通事故でけがをしたり、亡くなったりする人がいない、安心して暮らすことのできる町になったらいいなと思います。今日も私は、自転車に乗る前の三分間を大事にし、「急がず、左右確認、安全に」を心の中で唱え、ゆっくりとペダルを踏み出します。

私たちが考えるべきこと

新居浜市立川東中学校
二年　阪　波月

最近、高齢者ドライバーによる交通事故が後を絶ちません。アクセルとブレーキの踏み間違いや高速道路での逆走、ドライバーの意識喪失…。しかし、これらはどれも高齢者ドライバーによる事故ばかりではありません。もちろん高齢者ドライバーによる事故も多いですが、高齢者でないドライバーの事故も少なくありません。高速道路の逆走は、三～四割は、高齢者ではないそうです。「高齢者は免許証を返した方が良い。」全く、その通り。しかし、高齢者だけが事故を起こしているわけではありません。それなのに、そこまで言われるというのは悲しい限りです。

さて、ここまでは「ドライバー」に目を向けていました。しかし、「歩行者」「自転車」に乗っている人はどうでしょう。歩行者が、自転車が飛び出してきた、という事故も少なくないです。運転手には、運転するときのルールがあり、自転車に乗るときのルールがあるように、歩行者にも歩行者のルールがあります。しかし、私も含め、他の小学生、中学生、高校生は、あまりそのルールを守っていないと思います。

最近よく見かけるのは、歩行者用の道路を二列、三列になり自転車で並進していたり、歩行者も二列、三列で道を塞いで歩いたりと他の人の邪魔になる通行のしかたです。川東中学校には、学校の手前に「青春七色坂」と名づけられた、きつい坂があるのですが、その坂をしんどいからといって、自転車を押して、友達と並んで歩いたり、坂をのぼるときに並進して、ゆっくり進んで道を塞いだり、マナーを守っていません。自転車だと、坂がきついし、しんどいし、友達と話したいと思うでしょう。しかし、自動車の運転をしている人は、自転車が並進して横幅をとりすぎているせいで追い越せない、危ないと感じていると思います。自転車には自転車に乗っている人の考えがあり、運転手には運転手の人の考えがあり、どちらも譲れないところがあるかもしれません。しかし、私達が通っている道路は公共の場です。自分達だけのものではなく、皆の場所なのです。それなら、やはり私達に足りないのは「譲り合い」の心、「相手の立場に立つ」という考え、「これぐらいなら大丈夫だろう」という「認識の甘さ」です。

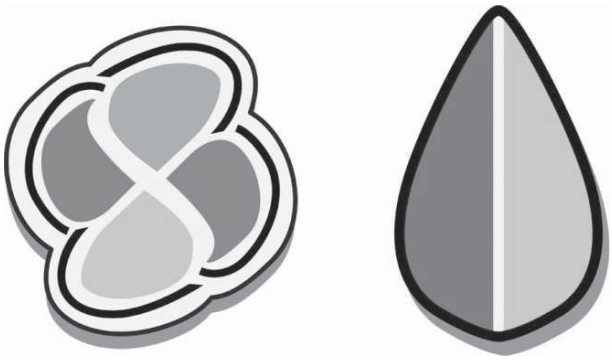
譲り合いは「相手の立場に立って考える」と少し、類似点があると思います。「これをすると誰かが困るな」「これは邪魔になるな」と「相手の立場に立って」道を譲り合うということが大事です。皆の場所なのに、自分優先ということは、あまりにも稚拙だと感じます。

また、認識の甘さは、誰でも感じている問題だと思います。歩いたり、運転したりしているとき、案外「自分は大丈夫」と思ってしまいがちですが、事故というのは突発的なもので、自分の癖が出るものです。自分がいつもしていること例えば、二列、三列で並進していても、いつもは大丈夫。でも今日は？明日は？明後日は？いつも必ず大丈夫ということはないのです。事故を不運だと言っている人もいますが、それだけではない場合もあるはずです。ですから、常に、事故が起きないように自分で、注意することが大事だと思います。

事故という存在は自分にとって非日常で、日常からかけ離れていると、思い込んではいないでしょうか。不注意、認識の甘さをなくし、相手の立場に立って考えること、譲り合い…。まだまだ交通事故を防ぐための課題は山積みで、その一つ一つをクリアしていかなければなりません。

高齢者ドライバーの免許返納や、技術力チェックも大切です。私達

には私達にできることが、たくさんあると思います。私の友達にも事故でけがをしたという子もいます。全てを事故のせいにするのではなく、自分で注意し、この山積みの課題を一つずつ解決していきたいものです。



「交通事故から学んだこと」

西条市立西条南中学校
二年　伊藤　柚葉

私が小学三年生の十月、弟が交通事故に遭いました。母の話では、日差しが強く、車に逆光が差したために、弟が道路に飛び出していることに気付くのが遅くなってしまったそうです。弟は命に別状はなかったものの、何針も縫う大けがをしました。包帯を何重にも巻かれた弟の姿を見たとき、とても怖くなったことを今でも覚えています。それまで私は、交通事故とは無縁だと思っていました。しかし、弟が交通事故に遭ってからは、決して交通事故は無縁ではないと思い、交通事故について考えてみることにしました。

まず私は、交通事故の主な原因について調べてみました。その結果、交通事故の主な原因は、「動静不注意」、「わき見運転」、「安全不確認」であることが判明しました。動静不注意とは、相手車両の動静の注視を怠った結果、事故に至る場合のことです。わき見運転とは、前方を見ずに運転することです。最近では、スマホによるわき見運転の交通事故が多発しているようです。安全不確認とは、一時停止や減速をしただけで、左右確認などの安全確認を十分に行わないことを指します。これらのことから私は、車を運転している人たちの意識の低さを感じました。また、運転中にもかかわらず、スマホに夢中になっていたり、安全確認を十分にしなかったりと、交通ルールを守らない人や命を危険にさらしている人がこんなにも多いことに悲しくもなりました。そこで私は、どうすれば交通事故が減るのかを考えてみました。

車や自転車などの乗り物は、遠出をするときや少し出かけるときには非常に便利な道具ですが、乗り方を一つ誤るだけで、事故の原因になってしまうということをしっかり理解しておくことが必要です。そ

のため、交通事故を減らすには、一人ひとりの意識を高めることが最も効果的ではないかと思います。車に乗っている人は、いつ、どこで、どんな事故に遭うか分からないということを常に念頭に置き、緊張感をもって運転するべきです。徒歩の場合は、なるべく道路の右側を通ったり、道路を横断するときには、必ず左右確認したり、夜には反射タスキや反射ベルトを着用したりするなどの対策をするべきです。このように、自分ができる対策をして、交通事故に対する関心をもつことで、より意識を高めることができると思います。

私は弟の事故があってから、交通事故の主な原因や交通事故を減らすために自分にできることは何なのかを考えることができました。「自分は関係ない。」「多少のことは大丈夫。」などと思い込むのではなく、「交通事故に遭わないようにするためにはどうすればいいのか。」と前向きな姿勢で考えてみてはどうでしょうか。そして、一人ひとりが意識を高くもつことで、交通事故を一つでも減らせていければいいと強く感じました。

交通事故を防ぐために

松山市立旭中学校
二年　大塚　玲奈

私は小学校に上がる前に、交通事故にあったことがあります。それは私が通っていたスイミングスクールの帰り道でした。夕方の交通量が多い時間帯に、母が運転する車に妹と一緒に乗っていました。この頃住んでいた家の近くの交差点の赤信号で止まっていたところ、突然、後ろの車が追突してきたのです。私はまだ小さかったので、その事故の詳しい内容は覚えていませんが、事故にあったときの大きな音と、怖ろしさは今まではっきりと覚えています。私に限らず誰しもがいつ事故にあうか分かりません。そして、事故にあうだけでなく、ある日突然、交通事故の加害者になってしまうかもしれないのです。私の乗っていた車に追突してきた人も、事故を起こそうと思ってしたことではなく、少しばかりの不注意から事故を起こしています。このように交通事故は、いつも突然起こってしまい、事故を起こしてしまう人も、事故にあってしまう人も、何の前触れもなく交通事故に巻き込まれてしまいます。これが事故の一番怖いところだと思いました。では、このような事故に対し、私たちは何もできないのでしょうか。いつ起こるのか分からない交通事故は未然に防ぐことは簡単ではないと思います。ですが私は、一人一人の気持ちの持ち方を変えるだけでも、交通事故を減らすことができると思います。

例えば、日頃から「自分は交通事故にあってしまうかもしれない」だとか、逆に「自分が事故を起こしてしまうかもしれない」という意識を持っておくだけでも、交通事故のうちのいくつかは防ぐことができると思います。ニュース番組で、「まさか自分が事故にあうと思わなかった。」や「こんなところで事故が起こるなんて。」などといったコ

メントを見たことがあります。このようなコメントには、「自分の身近な場所で、交通事故なんてそうそうあるものではない。」という心の油断が表れているのではないでしょうか。この油断が大きな事故に発展していくのではないでしょうか。実際に、事故にあうかもしれないという意識を持って普段の通学路を歩いてみると、いつもの通学路の危険なところが分かりますし、周りを見ようと意識することができます。このように、少し意識を変えてみるだけでも、いつもとは違う視点で交通事故について考えることができます。また、「自分が交通事故をおこしてしまうかもしれない」と思えば、いつも通っている道でも、ちょっと注意して、安全確認をするようになると思います。大事なのは、自分は事故にあわないという自信ではなく、自分は事故にあってしまうかもしれないと思い、周りに注意していくことだと思います。私が外出するとき、父や母が「車に気を付けなさい。」と言うのも、そういうことなのだと分かりました。私も、「自分は事故にあうかもしれない。」という意識を持って生活していきたいと思います。

　他にも、自転車に乗る時はスピードを出しすぎないようにするということや、交差点では一時停止をするなどといった当たり前のことをしっかりと行おうという気持ちをいつも持っておこうと思います。当たり前の交通ルールを守るというのはできているようでできていないことがあります。私も、曲がり角にいきなり飛び出して車とぶつかりそうになり、ヒヤッとしたことがあります。しっかりと交通ルールを徹底することで大半の事故は防ぐことができるはずです。実際に、インターネットを使って交通事故の防止法について調べてみると、「周りに注意しよう」や「しっかりと一時停止をしよう」などの、誰もがわかっているような簡単なことについて書かれていることが多いなと感じました。小さなことでもきちんと交通ルールを守っていこうと思います。そして、交通ルールをしっかりと守っていくためには、自分たちの心がけが大切です。ですが、体調が悪かったり、焦ったりしているといつもどおりの行動ができにくくなります。体調を整えたりすることも、事故を防ぐには大切な事だなと思いました。

　私は今回の交通安全作文を書くにあたって、事故の防止や交通ルールについていつもより詳しく、真剣に考えることができました。私は毎日三十分から四十分ほど歩いて学校に通っています。そして塾や習い事へは、親の運転する車で送り迎えをしてもらっています。普段、交通安全について意識したり、深く考えることはありませんが、私たちの生活には「交通」というものが欠かせません。そして、人や車が動く以上、交通事故が完全になくなることはないと思います。しかし、交通事故というのは、自然災害などとは違い、少しの心がけや注意で、ある程度防ぐことが可能です。これからも事故なく、安全に生活していきたいです。

ハンドルを握るということ

松山市立南第二中学校
二年　飛地　心温

最近、高齢者ドライバーによる交通事故を毎日のようにテレビで観ます。実際に目にすることも多くなりました。道路の逆走やアクセルとブレーキの踏み間違いによる危険な運転などでたくさんの衝突事故が起こっています。事故の衝撃はすさまじく、建物をひどく壊しているものもあれば幼い命まで巻き込んでしまうという最悪なものもあります。

なぜこのような事故が増えてきたのか、自分なりに考えてみました。原因として少子高齢化により、元気な高齢者が増えて運転する高齢者も増えたことや車の機能が進化し、運転技術が落ちた高齢者でも簡単に運転できるようになったことなどが挙げられます。また、高齢者自身が技術の低下に気付かず運転していることも大きな原因だと思います。年をとると視野が狭くなり目の前のものしか見えなくなったり、聴力が落ちて周りの音も聞こえにくくなったりするそうです。他にも反射神経や動体視力、思考能力の低下によって複数の情報を同時に処理することが難しくなり、瞬時に判断する力も低下します。それによってハンドル・ブレーキ操作に遅れが出ることで大きな事故にも繋がっていると考えられます。しかし身近に頼れる人が少ないため、ないと不便な車には乗ってしまうのが現状です。

今後、このような事故を無くしていくためには家族が免許返納を勧めるなどサポートしていく必要がありますが、私の祖父は免許を返納した際にとても落ち込んでいたと祖母から聞きました。今まで証明書を求められると運転免許証を提示していたのに手放してからは提示できなくなり、自分が年をとったことを痛感すると共に自信を失くしてしまったそうです。都会に住んでいて電車での移動ができるし、今は車を持っていないため免許がなくても不便はないけれど、そんな祖父でもこういう思いになってしまうということは、普段車がないと不便な生活をしている人にとってはもっと辛いことなのかもしれません。しかし今は免許を返納することで公共交通機関の料金の割引が受けられるなどのメリットもあり、地域によっては店からの配送サービスもお得に利用できるそうです。これからは高齢者にこのような返納制度があることを上手く伝え、自ら免許を返納する高齢者が増えることで多くの人が悲しむ事故を少しでも減らしていけるようになったら今よりもっと安心して過ごせる町になると思います。

一つの事故で被害者側も加害者側も人生が狂うと私は思います。被害者側は大事な家族を亡くしたり、幸い命が助かったとしても後遺症に悩まされたりと大きな悲しみを背負って生きていくことになるし、加害者側は事故を起こしてしまったという後悔はもちろん、人の命を奪ってしまった罪悪感も感じながら生きていかなければなりません。お互いに車への恐怖やその時感じた辛い思いは一生忘れられないと思います。もし私が被害者側の家族だったとしたらとても辛いのはもちろん、加害者側の家族だったとしても耐えられないくらい辛いと思います。

たった一人の危ない運転で大勢を巻き込んでしまうこともあります。事故は起きてからでは遅いです。まさか自分が事故を起こすと思って運転をしている人はいないと思いますが、免許があるからといって運転するのではなく、免許があり健康で安全な運転ができるという自信がある人だけが運転するべきだと思います。たとえ高齢者ではなく、若者の危険な運転でも同じ結果を招きます。携帯電話に気をとられた

運転や音楽を大音量で聴きながらの運転、睡眠不足による居眠りなど、集中力のきれた危険な運転は高齢者が起こしている以上の事故に繋がるかもしれません。

これから高齢者ドライバーはさらに増えてくると思います。免許を返納することで自信を失くしてしまうかもしれないけど、もし事故を起こしてしまうともっと大きな自信を失くすことになると思います。便利だからと軽い気持ちでハンドルを握るのではなく、事故が起きる前に免許を返納すると人生をもっと楽しめるようになると思います。今後、少しでも事故が減って多くの人が安心して過ごせる町を創るために、私も周りの人に免許返納のメリットをどんどん伝えていきたいです。

自転車通学で思うこと

松山市立久米中学校
二年　大山　さくら

自転車の運転が苦手な私が、自転車通学二年目を迎えました。去年の今頃は、重い荷物を背負ってフラフラしながら、周りの誰よりも慎重にハンドルを握っていたと思います。雨の日など天候の悪い日は、自転車の運転がさらに怖かったので、いつもより早く家を出発していました。しかし、一年間同じ道を通って同じ時間に通学していると、さすがの私も運転に慣れてきました。危険な箇所や注意が必要な場所もわかってきて、いつの間にか自転車の怖さや不安感がなくなっていました。また、はじめのころは自転車を購入したお店で定期点検してもらっていたのに、それもしなくなっていました。

そんな自分のことはさておき、登下校中は、イヤホンを付けて猛スピードで走っている学生や、信号無視をする人、並列走行する人など、ほかの自転車通学生のマナーが気になり、危ないなぁと思うことが多々ありました。

そんな中で、先日私は下り坂の先の十字路で一旦停止しようとしたところ、自転車がすぐには止まれず、徐行してしまうことがありました。その時は車も走っていなかったため、深く考えることはありませんでした。しかし、その数日後の登校中にこんなことがありました。自転車で前を走っている友人がブレーキをかけたので、私も同じようにブレーキをしたにもかかわらず、ぶつかりそうになったのです。予想もしていなかったのでとても焦り、この時はじめて、ブレーキの利きが悪くなっていることに気づきました。今回は運よくぶつからずに済んだけれど、もしこれが滑りやすい雨の日だったり、下り坂だった

り、相手が通学途中の小さな子供だったら、けがをさせていたかもしれないと思うと、とても怖くなりました。

そんなことがあって、夏休みに入ってすぐに、自転車屋さんへ点検に持っていきました。そこでは、ブレーキワイヤーとチェーンのたるみを直してもらい、ハンドルとペダルのゆるみのチェック、タイヤの空気圧の調節、各部に油をさしてもらうなど、しっかりメンテナンスをしていただきました。その後自転車に乗ると、新車になったのかと思うほどの違和感がありました。それだけあちこち調節しなければならなかったということです。自転車は、たった一年で私が思っている以上にガタがきていました。

車やバイクに乗るためには免許証が必要で、二年に一度の車検もあります。しかし自転車は、年齢制限もなく自由に乗ることができます。気軽に使用できるからこそ、一人一人が安全に対する意識を持ち、しっかりメンテナンスすることが大切だと思います。

最近、高齢者ドライバーが大きな事故を起こし、歩行中の子供たちがそれに巻き込まれるといったニュースをよく耳にします。このため、運転に自信がなくなってきた高齢者は、免許証を返納するべきだという声も上がっていますが、一方で、自動車そのものの安全性能を高める開発がされているという話も聞きます。安全な車とはどのようなものか調べてみると、衝突軽減ブレーキや誤発進抑制装置、踏み間違い時加速抑制装置など、事故を予防抑制する機能が搭載された車だそうです。私の祖父も、車の運転をしていますが、年とともにとっさの判断力が低下して、いざという時の反応も鈍くなったと感じてきたので、安全機能の付いた車がいいなと言っていました。事故を起こせば、自分だけでなく、周りの人に被害を与えることが一番怖いと思います。高齢者に限らず、すべての人にとって、乗り物が安全であることはとても重要です。

命を守るためには、たとえ自転車でも、乗り物は危険なものだということを理解しなければいけません。いくら慎重に運転していても、安全ではないものに乗っていると、事故を起こす可能性は高まります。交通ルールやマナーを守るのはもちろんのことですが、自分の乗り物の安全管理をしっかりすることが大切なのです。私は自転車のブレーキのゆるみで危険な目にあうまで、メンテナンスの必要性をそこまで重視していませんでした。ですがこれからは定期点検を忘れず、常にいい状態で自転車を乗れるようにしたいと思います。

「生きること」

愛媛大学教育学部附属中学校
三年　東　亜樹

私は小学校三年生の時、交通事故にあった。その日は弟の帰りが遅かった。完全下校時刻から一時間たっても帰ってこないのだ。私はというと弟が家の鍵を持っているので、中に入れず外にいた。始めは「今日は友達と遊ぶのに…。」とイライラしていた。しかし、だんだん不安になった私は、自転車に乗って弟を探しに行った。私達の通学路には信号がない横断歩道がある。いつもなら気を付けて渡るそこを、焦っていた私は急いで飛び出した。…数秒後には地面に放り出された私の姿があった。バイクの音も聞こえなかった…。横断歩道の近くに住んでいる家族が、ぶつかった音を聞いて何事か、と飛び出して来た。その家族の子供が私と同じ学校に通っていた。私が制服だと気付くと、すぐに学校に連絡してくれた。バイクに乗っていた女性は平謝り。一緒にいた友達は泣いている。わたしはふと気付いて手足を見ると、血が出ていた。ヘルメットをしていた私は少ないけがで済んだ。バイクに乗っていた女性もけがをしていた。そこへ先生がやってきて、親を呼んでくれた。悪いのは急に飛び出した私だったのに、女性は母にすごく謝っていた。後、母に言われた言葉が頭に焼きついている。それは「バイクと自転車だったら、どんなに自転車側が悪くても結局はバイク側が悪くなってしまうの。幸いけがは軽かったけど、もっと大きいけがをしていたらあの女性はどうなっていたと思う?交通ルールを守らなかった亜樹がいけなかったのに、向こうは重い罪を問われたかもしれないよ。『ちょっとしたこと』が大きいことにつながるんだから『ちょっとしたこと』を大事にしなさい。」という言葉だった。この言葉は当時の私の心にとても刺さり、深く反省させた。

つい先日も滋賀県大津市で直進車と右折車が衝突し、巻きぞえで保育園児十六人が死傷した。その事故で二歳の子供が二人死去した。遺族は「一日たつごとに家族としても胸が張り裂ける程の深い悲しみに包まれています。」と語った。また、その事故によって重傷を負った女児がいる。その子は大腿骨の付け根が完全に折れていて、今も入院中で車いすだという。骨が成長を止めてしまう成長障害の後遺症が出る可能性もある。女児は事故から最初の一週間は車にぶつかった際の衝撃が体に刻まれていて、毎夜体をガタガタ震わせて目を見開き、「ママー!落ちるー!イヤだー!!」と泣き叫んでいた。現在は話ができるまでに落ち着いてきたが、顔を自分でたたいたり、眉を引っ張ったりすることがあり、保育園や友達の話は一切しなくなったという。

私はこれら二つの事故を通し、感じたこと考えたことが二つある。一つ目は被害者も、加害者も、それを見た人も、家族も、ニュースで聞いた人も、全員が悲しい気持ちになり、怒り・後悔の念を抱くことだ。滋賀県の事故では、加害者の女性は「さっき見た子供達と一緒の保育園かな。かわいいな。」と思って見ていて注意力が散漫していた状態で右折したという。そういう「ちょっとしたこと」が本当に大きい取り返しのつかないことを引きおこしてしまうんだなと改めて感じた。ＳＮＳでも保育園児に対し、「かわいそう」といった内容があげられていた。私自身も「何で関係のない二歳児が二人も亡くなることになったの?」と怒りが沸きあがった。二つ目はヘルメットやシートベルトの大切さだ。男子中学生が車にはねられた事故があった。その子はヘルメットをつけていたが、意識不明の状態が続いた。ではヘルメットをつけていなかったらどうなっていたのか。想像したくもない。その時のヘルメットは半分位凹み、原形を留めていなかったという。現に私もヘルメットをつけていたことで大けがを防ぐことができた。

そうはいっても、たまにヘルメットやシートベルトをしていない人を見かける。つけていない人を見た時ふと思ってしまう。「この人は大丈夫なのかな」、と。事故はいつおきるか予測できない。それが怖い。日頃から防止しておけることはしておくのが大切だと思う。

起きてから変えるのは遅い。何かあってからでは遅いのだ。命は一つしかないのだから。そのことを肝に命じてこれからも過ごしたい。そして交通事故が一件でも減るように、自分から行動できる人になりたい。

「免許返納で事故予防」

愛媛大学教育学部附属中学校
三年　城田　美玲

一千三百一。これは、愛媛県警察本部が発表した昨年に起きた高齢運転者交通事故発生件数の数値である。みなさんはこれを聞いてどう思うだろうか。分かりやすく言い換えると一日で約四件もの事故が起こっていることになる。そう考えるとこの数値は多いといえるのではないだろうか。高齢者による事故の主な人的要因は「発見の遅れ」が全体の八十％・「判断の誤り」「操作上の誤り」が二十％となっている。これらは加齢によるあらゆる身体能力の低下が関係していると思う。

私が今回、高齢者による事故についての作文を書こうと思った理由は次の通りだ。ある日私が家でニュースを見ていると連日に渡り高齢者によるアクセルとブレーキの踏み間違い事故が取り上げられていた。これを見ていた私の横で母が「交通ルールを守っとる人でも事故に巻き込まれることがあるけん気を付けな。」と自転車通学の私に言った。私はその言葉を真摯に受け止め、自分も気を付けなくてはならないと思ったのと同時にいくら気を付けていても防ぐことができない事故が起こることもあるんだと思った。そうだとするとそのような事故はどう防げばいいのか。最近では、さまざまな車に踏み間違いを防ぐ装置が取り付けられるようになった。しかし、それでも確実に減るとは言いにくい。確実に減らす方法は高齢者が自動車を運転しないことに限ると思う。しかし実際、免許を返納したくてもできない高齢者が多い。例えば仕事として農業を営んでいる人は、もし車がなければ収穫したものを自宅まで担いでいく必要がある。これは高齢者にとってはとても負担がかかる。このように自動車がなくなると困るという人が世の

中大勢いる。ではこの問題はどう解決すればいいのでしょうか。私が大切だと思うのは、高齢者が返納しやすい環境を整えてあげることだと思う。

愛媛県松山市では、免許を返納すると公共交通機関で利用できる乗車券が五千円分もらうことができる。けれどもし私が高齢者の立場に立ったとするとおそらく免許を返納しようと思わないだろう。なぜなら、公共交通機関を無料で利用することができるのはほんの少しの間だけで、それ以降は自分でお金を払って出かけなくてはならないからだ。そうなるのなら、免許を返納せず自分で運転する方が良いとつい思ってしまう。だから、こういう状況は免許を返納しやすいとは言えない。高齢者の方々が求めているのはきっと返納後、ずっと公共交通機関を安く利用できるような社会だと思う。しかし、その社会実現まではもう少し時間がかかりそうだ。

突然だが、免許返納をより身近に感じたいと思ったので私の祖父と祖母について話そうと思う。私の祖父、祖母は二人共現役で車を運転している。私の母が仕事で私を塾やテニスコートに連れていけなかった時はよく祖父・祖母に連れていってもらった。また、祖父と祖母の実家は小田町にあるのだが、二人共実家が好きでよく車で行き、米や野菜などたくさんいただいて帰るのだ。この生活のままもし、祖父と祖母が免許返納したらどうなるのか想像してみた。まず母が仕事で私の送り迎えができない時、私はどうすれば良いのだろう。歩いて行き帰りするか自転車か公共交通機関を利用するかの三つ方法が挙げられる。歩きと自転車は短距離なら問題ないけれど、長距離になると難しい。公共交通機関はどこへでも行くことができるが、車なら寄り道しやすいし、待ち時間が無く、時間を有効に使える。次に祖父と祖母が故郷へ帰る時はどうすれば良いだろう。これは公共交通機関を利用するのが一番良いと思うが、需要が少ない地域の為一時間に一本くらいしかないから不便だ。おまけに二人は帰る時に毎回野菜などをもらっている。バス停から家まで歩いて持って帰るのはとてもつらいと思う。このように私の身近でも免許返納しづらい人がいることを知った。

私は祖父と祖母が免許返納についてどう思っているのか気になったので、直接聞いてみた。祖父、祖母共に「八十歳超えるまでは免許は返納したくないかな。運転するのも好きだし。」と言っていた。私は二人がまだ運転したいというので免許返納は勧めません。けれど、事故は絶対にしてほしくないし、私が免許を取った時は、祖父・祖母を乗せて少しでも負担を減らしてあげたいと思う。

この作文を通し少しでも免許返納について考えてもらい、事故件数が減るといいなと思う。

交通事故をなくすために

松山市立三津浜中学校
三年　髙橋　穂乃佳

「キキーッ、ドンッ、ガシャーン…」

それは突然起きた。それは普段と何も変わらない冬のある日、原付に乗って買い物から帰っていた祖母が、タクシーと正面衝突をして、すごい音と共に、空高く宙に舞ったらしい。

事故から数日たったある日、お見舞いに行ったところ、そこには今まで見たことのない祖母の姿があった。集中治療室で、人工呼吸がつけられており、体中に包帯がぐるぐると巻かれていて、見るだけで痛々しい様子で恐怖を覚えた。

「ばあちゃん、大丈夫？」

そう尋ねても、反応は無かった。ただただ重い空気がこの集中治療室に流れていた。事故から約十日後、祖母は帰らぬ人となってしまった。この話はまだ私が幼稚園の年長の頃の話であるが、それから八年たった今でも鮮明に覚えているし、決して忘れることはしないだろう。

毎年、交通事故でたくさんの命が奪われている。最近のニュースでも、多く報道されている。特に高齢者ドライバーについてのニュースがよく見受けられる。

高齢者ドライバーによる事故の多くは、認知症の疑いのあるものがほとんどらしい。しかし、それでも運転を続ける理由は主に四つあると私は考えた。一つ目は、自分の運転に自信があるから。二つ目は、趣味の一環だから。三つ目は、田舎なので公共の乗り物があまりないから。四つ目は、自分の行動範囲が大幅に減ってしまうから。などがあげられる。高齢者ドライバーによる交通事故を減らすことも大切だが、高齢者に運転をやめさせるといっても簡単ではないだろう。先日、テレビで高齢者ドライバーによるブレーキとアクセルペダルの踏み間違いを防止するグッズが今後、発表される予定だと報じられていた。このような物が普及されたら、今のような問題が少なくなるだろう。高齢者が免許を自主返納したからといって、安心するのではなく、車が無いと生活できないという現状を理解しながら、家族や周りの人が支える環境が大切である。

もう一つ気になるのは、ながらスマホをしている人たちについてのことだ。最近、スマホの普及が進んでいて、周りでも自分用のスマホを持っている人も多いらしい。道を歩きながら、友達と一緒にスマホをさわっている小学生もよく見かける。自転車にのっている中高生もスマホを見ながら運転している人を多く見る。でもそれは、子供だけではない。大人の人も車を運転しながら平然と電話をしたりスマホをさわっている。スマホをしながら、道を通ったり、運転したりすると、実際見えている目の範囲より半分以下しか見えないらしい。その状態だと、いつ、どこで事故が起こってもおかしくないだろう。私の祖母はいつも安全に気を付けていたのに、タクシーと正面衝突をし、死んでしまった。それなのに、交通事故の原因がスマホをさわっていたという不注意で起こってしまったら、被害者の人やその家族の思いは、とてもやりきれず、無念だと思う。

交通事故は起こしたくないとほとんどの人が思っていると思うのに、なぜ交通事故の量は減らないのだろうか。やはり一番は、これくらいなら大丈夫だろうという甘い気持ちがあったり、まさか自分には起こらない、自分の運転に自信があり、自分は大丈夫と思い込んでいる人が多いからだと私は思う。運転する人はもちろん、歩行者も、全員が細心の注意を払うことが毎回毎回できているのなら、交通事故の数も

かなり減るのではないのだろうか。
　交通事故は怖い。交通事故はその被害者や加害者だけでなく、その家族や周りの人も不幸にしてしまう。人事ではなく、自分のこととして考え、
「いつ、だれが、交通事故にあってもおかしくない。もしかしたら、自分が今日、交通事故にあうかもしれない。」
という気持ちで、安全確認をきちんとしたり、時間や心にゆとりを持てば、防げる事故もたくさんあると思う。
　私に今できることは、家族や周りの友達で、危ない運転をしている人がいたら、勇気を持って注意することだと思う。大切な人を交通事故で失うのは、とても悲しいから、あとで後悔しないように、安全運転や、交通ルールを守ることの大切さを伝えていきたいと思う。

考えることから

久万高原町立久万中学校
三年　岩崎　結斗

「右見て左見てもう一度右を見て渡る」。
　小学校の頃、車が通る場所や横断歩道ではこのように渡りなさいと教えられてきた。これは、日常生活において最低限のマナーとして僕のに体に染み込んでおり、いつの間にか当たり前の習慣になっている。しかし、中学生になり周りの友達や先輩の姿を見ると、圧倒的にできていない人の方が多いことに気付かされた。近年、高齢者による事故が多発している中で、高齢化が進むこの久万高原町に今僕たちは住んでいる。
　では、高齢者が多い久万高原町で安全に過ごしていくためには一体どうすればよいのだろうか。例えば、定期的に交通安全に関する講習会を開く、町内放送で呼びかけるといったことが挙げられる。確かにこれらも一つの方法だとは思うが、やはり一番よいのは自分の頭でしっかりと考えることだと思う。自分の行動が周囲にどんな影響を及ぼすのか、今とるべき行動は何であるのか、といった一歩先を見すえた考え方をするべきではないだろうか。こうした考え方は、様々な場面で生かすことができると思う。家族や友達と話をするとき、「こう言ったら相手は傷つくだろうな」と考えるだけでも、相手を気遣うことになる。相手への気遣いは、交通マナーにおいても重要なものだ。交通事故にマニュアルなんてものはない。だからこそ自分の頭でしっかりと考え判断することが大切になってくるのだ。
　交通事故は高齢者によるものだけではない。その中でも僕が一番問題視しているのは、自転車と自動車の衝突事故だ。今の日本では、た

とえ自転車が一方的に飛び出して自動車側に全く非がなかったとしても、罪に問われるのは自動車側というのが現状である。必ずしも百パーセント自動車側が罰せられるというわけではないが、六対四や七対三の割合で自動車側が不利な立場になることがほとんどである。もちろん、自動車側の不注意による事故もあると思うが、自転車を運転する僕たち自身も気を付けなければならない。インターネットが普及した今の環境では、イヤホンをつけたまま走行したり、スマホを操作しながら片手で自転車を運転したりする危険な行為も多く見られる。自転車を運転している側の不注意で起こる事故も決して少なくはないのだ。高齢者による事故が多いことは否定できないが、元気な若者が事故を起こしてしまっていること、またその原因を自らつくってしまっていることは非常にもったいないことだと思う。そこで僕たちに求められるのは、やはり考えることだ。「イヤホンをつけたまま自転車に乗っていても今まで事故にあったことはないから大丈夫」「自分は自転車の運転が上手だから片手で運転しても大丈夫」といった油断や過信こそ、交通事故の引き金になってしまうのではないだろうか。そんなときちょっと立ち止まって、「今までは大丈夫だったけれど、もしかしたら事故につながるかも」「片手で運転していると運転操作を誤ってしまうかも」と考えることが事故の抑止力になるのだと思う。しかし、全ての場面でそのように考えることは面倒だと思う人もいるかもしれない。日頃からいつも「事故やけがをしたらどうしよう」と気を張って生活していては息苦しく感じてしまうことだろう。しかし、事故を起こしてからいくら後悔しても時間を戻すことは決してできないのである。

僕自身、自分の不注意によって事故にあいそうになったことがある。ある朝、中学校へ向かう途中のことだ。いつもは減速して自転車を降りてから安全に渡っている横断歩道。しかし、その日は急いでいることもあって減速せずに急ブレーキをかける形になってしまったのだ。僕は自転車と共に転倒し、道路に上半身が出ている状態になった。幸いなことに、そのとき車は通っておらず自転車を起こしてなんとか学校に行くことができた。しかし、もしあの瞬間に車が通っていたら、僕は今頃どうなっていたのだろうと考えただけでも怖くなる。僕のように失敗から学ぶこともあるかもしれないが、一歩間違えれば取り返しのつかないことになりかねない。だから、しっかりと考えた上で正しい判断のもと自転車などを利用するべきだ。

日常生活には様々な危険が隠れているが、そのうちの一つが交通事故である。それは自然災害とは違って僕たち人間が引き起こしてしまうものである。人間が起こすものである以上、それを防ぐにはやはり一人一人がよく考えて正しい判断をすることが重要になってくる。面倒に思うこともあるかもしれないが、そうすることで自分や他の誰かの命を失わずに済むのであれば、手間を惜しまずに実践してほしい。一人一人が気を付ければ、交通事故発生率も今よりもっと減少するはずだ。まずは、僕自身しっかりと実践していきたい。

祖父と免許返納

八幡浜市立真穴中学校
三年　井上　為雄理

最近、高齢者による自動車事故の話題をよく耳にする。ブレーキとアクセルを踏み間違えたとか、道路を逆走したとか、テレビのニュースで大きく取り上げられ、社会問題にまで発展している。高齢者には、自分の運転に少しでも不安を感じたら、事故を起こさないように、免許証を返納することが求められているようだ。この意見に僕も賛成なのだが、交通機関が発達している便利な都会と、僕が住む地域とでは、免許証を返納した後の生活の不便さが全く違うと思う。

僕の住む地域は、運転免許証を持ってなかったらとても不便な所だ。バスは一、二時間に一本だし、早朝にはバスの運行がないのでタクシーを利用しなければならない。この地域には多数の高齢者が暮らしていて、たくさんの方が、病院通いをしている。その度にタクシーを利用したら、経済的にも苦しくなるだろう。もっとバスの本数を多くしたらいいのにと思うが、通るバスを見ても乗ってる人がとても少ないから、難しいだろう。それに、バス代も思うほど安くはないし、家からバス停に行くだけでも、かなり距離がある。そんなわけで、僕の住む地域では、自動車が手放せない。また、みかん農家が多いので、仕事に自動車が必要な人も多い。

実は、僕の家には今年九十二歳になる祖父がいる。まだまだ元気で、ばりばりと働き、今でも自動車の運転をしている。母や叔母は、そろそろ免許証を返したらどうかと、度々言ってきたようだが、祖父は、もう一年、もう一年と言いながら、返納を先延ばしにしている。病院通いや買い物も自分の運転で行くし、山仕事も現役なので自動車がないと困るのだろう。運転をしない祖母は、祖父の運転に頼っており、自分が不自由になるからだろうが、免許証の返納に強く賛成はしていないようだ。祖父も祖母も、返納後は母に頼るしかないから、外で仕事を持つ母に迷惑を掛けたくないと考えているのかもしれない。

僕の家は、父と祖父が中心となってみかん作りをしてきた。祖父は、ここ数年で山仕事を少しずつ減らしながら、免許証の返納を考えていたようだ。しかし、三年前に、父が心臓を悪くし、山仕事ができなくなったので、祖父と祖母中心のみかん作りに戻ることになった。そして、去年の冬、父が亡くなったので、祖父はますます免許証を返納できなくなってしまった。しかも最近、免許証の更新時の認知テストにも、祖父は合格してしまった。

「高齢者は、自分が事故をしないと免許を返納しないのだから。」と、母はよく口にする。「あそこの〇〇さんが、車をぶつけたから免許証を返すらしいよ。じいちゃんも事故する前に免許証を返したら。」と、母が祖父に言っているのを何度も僕は耳にしている。本当にそうだと思う。事故を起こしてからでは遅い。事故で身体が不自由になったり、命を落としてしまったりすることもあるかもしれない。僕は、毎朝おいしいみそ汁を作ってくれる大好きな祖父に、これからも元気でいてほしい。もっともっと長生きしてほしい。また、祖父が事故を起こし、他人を巻き込んでしまったらと考えると、すごく怖いしつらい。祖父は大きなショックを受けるに違いない、祖父に傷ついてほしくない。辛い思いをしてほしくない。そうなる前に、やっぱり祖父にはなるべく早く、免許の返納をしてもらいたいと思う。

ただ、もし祖父が免許証を返納してくれたとして、その後の生活はどうなるのだろう。不安は残る。免許を返納すると、山まで歩かないといけないし、収穫したみかんを選果場まで運ぶのも難しくなってしまう。祖父だけではない。多くの高齢者が返納後の日常生活に不安を

感じていることも、免許証を返納する人が増えない大きな理由ではないだろうか。そんな不安を解消するために、僕は、免許証を返納した後の生活の保障のような制度があればいいと思う。路線バスやタクシー料金の割引サービスや、スーパーまでの無料運行バスなどは難しいのだろうか。乗り合いタクシーもいいと思う。みんなが安心して、安全に暮らせるようにすることが、最も大切だと思うからだ。

母と僕は、祖父になるべく早く免許証を返納してほしいと伝えた。返納後は、母がサポートする。それは当たり前のことだから心配しなくていいよとも伝えた。そして、何とか祖父を説得することができた。祖父は、まだ悩んでるようだったが、今年の農繁期が終わったら返納すると約束してくれた。

高齢者に限らず、誰もが加害者にも被害者にもなるのが交通事故だ。だから、運転者も歩行者も全ての人が交通ルールを守り、相手を思いやる気持ちを持って生活することが大切だ。返納するまでの祖父の安全を願いながら、僕自身も安全に生活していこうと思う。

自転車に「TSマーク」を貼りましょう！！

◇　ＴＳマークには保険が付いているので安心

○　年に１回、自転車安全整備店で、点検・整備を受けると、そのしるしとして「ＴＳマーク」が自転車に貼付されます。

○　「ＴＳマーク」には、賠償責任保険と傷害保険の２つがセットになった１年間の付帯保険が付いているので、もしもの時に安心です。

○　お近くの自転車安全整備店へご相談ください。

◇　付帯保険の補償内容が変更（H 29.10.1 ～）

補償内容	補償額等
①　賠償責任保険 （被害者が死亡等した場合に法律上の損害賠償責任を負った時の補償）	○　死亡・重度後遺症害（１～７級） 限度額　５千万円 ↓（変更） 限度額　１　億　円
②　傷害保険 （自転車利用者が死傷等した時の補償）	○　入院 15 日以上　10 万円 ○　死亡・重度後遺症害（1 ～ 4 級）　100 万円
③　被害者見舞金 （被害者が入院した時の見舞金）	○　入院 15 日以上　10 万円

「思いやり１．５ｍ」運動の実践を！

愛媛県では、「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」の基本理念として、歩行者・自転車・自動車等がお互いを思いやり、安全・快適に道路を共有する「シェア・ザ・ロード」の精神の普及に努めており、ドライバーの皆様には、自転車を追い越すときの事故防止のため、「思いやり１.５ｍ」運動の実践を呼びかけています。

ドライバーの皆様は、自転車の側方を通過するときは１.５ｍ以上の安全な間隔を保つか、道路事情等から安全な間隔を保つことができないときは徐行していただきますようお願いします。

交通安全年間スローガン最優秀作

○　子供の部門（小・中学生からの応募～過去十五年間の内閣総理大臣賞）

平成　十八年　手を上げて　しっかり見よう　右左
同　十九年　青だけど　車はわたしを　見てるかな
同　二十年　点めつだ　一度止まって　次の青
同　二十一年　じこがない　そんなまいにち　うれしいな
同　二十二年　さあかくにん　ライト　ブレーキ　ヘルメット
同　二十三年　星キラリ　自転車ピカリ　帰り道
同　二十四年　いそいでも　かならずかくにん　みぎひだり
同　二十五年　ヘルメット　ぼくのだいじな　おともだち
同　二十六年　にっぽんを　じまんしようよ　事故ゼロで
同　二十七年　ルールむし　しん号むしは　わるいむし
同　二十八年　しんごうが　あおでもよくみる　みぎひだり
同　二十九年　ペダルこぐ　免許はないけど　ドライバー
同　三十年　自転車は　車といっしょ　左側
同　三十一年　とび出さない　いったんとまって　みぎひだり
令和　二年　しっかりと　止まってかくにん　横だん歩道

～ 愛媛県交通安全協会ホームページ 広告協賛事業所 （限定１００社）～

【四国中央市】
金生運輸（株）
四国紙販売（株）
大王製紙（株）
丸住製紙（株）

【新居浜市】
一宮運輸（株）
（株）大石工作所
桑原運輸（株）
住友化学（株） 愛媛工場
住友共同電力(株)
住友金属鉱山（株） 別子事業所
住友重機械工業（株）愛媛製造所 新居浜工場
宝運送（株）
東予信用金庫
日泉化学（株）
（株）ハタダ
（株）三好鉄工所

【西条市】
（株）田窪工業所

【今治市】
（株）IJ C
一広（株）
今治造船（株）
今治ヤンマー（株）
四国ガス（株）
四国通建（株）
四国陸運（株）
瀬戸内運輸（株）
太陽石油（株） 四国事業所
波止浜興産（株）
BEMAC株式会社
眞鍋造機（株）

【松山市】
あいおいニッセイ同和損害保険（株）
アカマツ（株）
アサヒビール（株） 松山支社
（株）アテックス
アトムグループ
（株）アベホンダHonda Cars 松山北
池田興業（株）四国支店
（株）井関 松山製造所
（株）伊予銀行
（株）伊予鉄グループ
（株）NTTドコモ四国支社 愛媛支店
NTT西日本
（株）エヒメエレクトメンテナンス
愛媛近鉄タクシー（株）
（株）愛媛銀行
（株）愛媛CATV
（一社）愛媛県警備業協会
（一社）愛媛県指定自動車教習所協会
（一社）愛媛県自動車整備振興会
愛媛県遊技業協同組合
（株）愛媛新聞社
愛媛信用金庫
愛媛綜合警備保障（株）
愛媛ダイハツ販売（株）
愛媛トヨタ自動車（株）
愛媛トヨペット（株）
愛媛日産自動車（株）
オオノ開發（株）
（株）門屋組
（株）ガリレオコーポレーション
国際セーフティー（株）松山支社
JA共済連 愛媛
JAバンクえひめ
四国電力（株） 愛媛支店
四国名鉄運輸（株）
四国旅客鉄道（株）
JAF愛媛支部
（株）スズキ自販松山
（株）セキュリティエヒメ
セコム（株） 松山統轄支社
(一社)全国道路標識・標示業 四国協会 愛媛県支部
全国農業協同組合連合会 愛媛県本部
DCMダイキ（株）
（有）大豊陸送
（株）たいよう共済 愛媛支店
帝人（株） 松山事業所
テルウェル西日本（株）
トヨタ L&F 西四国（株）
（株）トヨタレンタリース西四国
南海放送（株）
日本郵便（株） 四国支社
（株）風土
フェイス・ソリューション・テクノロジーズ（株）
（株）フジ
（株）フジセキュリティ
（株）フードサポート四国 ヨシケイえひめ
三浦工業（株）
（株）村上モータース
（株）四電工 愛媛支店
（株）レディ薬局

【伊予市】
山陽刷子（株）
マルトモ（株）

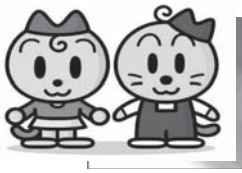
【伊予郡松前町】
東レ（株） 愛媛工場
日章（有）

【大洲市】
（株）一宮工務店

【八幡浜市】
（株）サンリード
八水蒲鉾（株）
堀田建設（株）

【宇和島市】
宇和島自動車（株）
宇和島信用金庫
ベルグアース（株）

(令和元年8月1日現在)


交通安全活動を支援しています。
一般社団法人
愛媛県交通安全協会
Ehime Traffic Safety Association
〒799−2661 愛媛県松山市勝岡町1163−7
TEL：089−979−2101